

Vie Cent ● 編集長対談

素敵に生きる

SUTEKI LIFE<sup>12</sup>

# 銀河観音に平和を託して

夢枕に突然現れた観音。それは輝く銀河と共に、目の前にただ静かに佇んだという。言葉を発せず見つめ合うことで「自分の描く観音が世界の平和と人々の覚醒を祈る銀河観音であると知らされました」。その日を境に、高杉嗟知さんの描く艶麗な観音画はクチコミで広がり、出会う人々の心をつかんで離さない。

画僧

高杉嗟知さん



Vie Cent ● 編集長対談

素敵に生きる

SUTEKI LIFE<sup>®</sup>

# 夢枕に突然現われた 銀河の彼方に立つ観音様



たかすぎさち●横浜市在住。画僧。水墨観音画家。仏教大学仏教学科卒業後、加行課程修了。京都知恩院にて1997年に僧籍少僧都を得る。1999年に観音画を描き始め、2000年より横浜・京都・鎌倉・銀座など各地で「銀河観音」巡回展開催。ベルギー・中国の国際展やサンフランシスコでの個展でもスピリチュアルアーティストとして絶賛される。エッセイストとしても新聞連載や広告など枠にとられない独自の世界観を持ち活躍。国際文化交流功労特別大賞ほか受賞多数。「sachi庵」庵主。

藤本 本当に素敵な絵ですね。先ほどから拝見していて、描かれている観音様が、なぜか高杉さんに似ているように思えるんです。

高杉 そうですか。ありがとうございます。描くときは何も考えないの、自分ではわからないんですけど。

藤本 それと高杉さんの描かれる観音様には、いろんな表情があるんですね。やさしさだけでなく、力強く見守る感じのものとか…。

高杉 じつと話を聴いてくれたり、微笑んだりする感じのものや、しっかり見つけてくれたり、そばに一緒にいてくれる感じがするものだったりと、それぞれ微妙に違います。

藤本 そもそも高杉さんが、観音様の絵を描くようになったきっかけは、何だったのですか。

高杉 初めて描いたのは、9年前のこと。それまでに起こった出来事の中で、どれか一つが欠けても、出会った誰か一人が欠けても、あの日、観音を描くことはなかったと思うのです。時の流れと人の流れの中でごく自然に観音を描くシーンにたどり着いたというのが実感ですね。直接のきっかけは友だちです。まず友だちの友だちに墨絵画家の個展に誘われ、私が別の友人もお連れすると、その方



ヴィサン編集長

## 藤本裕子

(ふじもと ゆうこ)

株式会社トランタンネットワーク新聞社代表  
1956年福岡県出身、横浜市在住。19年間母親の自立をコンセプトに「お母さん業界新聞」の発行ほか、さまざまな子育て支援事業を展開。現在は新聞「LIVE LIFE」を発行。「ヴィサン」100号より編集長に就任。情報発信やネットワークづくりの傍ら、地域・教育・子育て・生きがいなど多彩なテーマで講演。「お母さん大学」を立ち上げ、全国展開中。  
<http://www.30ans.com>

が先生と意気投合。後日、今度は私が友人のお供で行きました。そして友人がお地藏様を描いたとき、「私だったら観音！」とフツツと思ったんです。もし、友人が花を描いていたら、観音は思い浮かばなかったかもしれない。そう思うと、こわいくらいに一つひとつの出来事に意味があり、つながっていたのです。

藤本 どんな感じでしたか。

高杉 すごい手心えがありました。「今、私の心臓は観音を描くためにドキドキと動いてくれている」と思い

ましたね。あどけなくて無垢な観音  
が、この掌の中から生まれたんです。  
パズルの最後の「コマ」がピタッとハ  
マったみたいに、私、その瞬間から  
観音を描く人になってしまったんで  
す。もう水を得た魚状態で、その夜  
から夢中で描き続けました。

**藤本** もともと墨絵の経験があった  
わけではないのですね。

**高杉** 全くありませんでした。ただ  
何十年とブランクはありましたが、  
子どもの頃に書道や油絵に熱中した  
時代がありますので、墨や筆には多  
少、慣れていたかもしれませんね。  
通ずるところがあったのかとも思い  
ます。

**藤本** 道理で、基礎となるものはあ  
ったのですね。とても初歩的な質問  
ですみませんが、観音というのは女  
性でしょうか、男性でしょうか。

**高杉** 男性と女性を超えた存在であ  
るといわれています。でも私の描く  
銀河観音は、とても女性的だと思います。

**藤本** では「銀河観音」とは、どん  
な観音なのでしょう。

**高杉** 観音画を描き始めてから半年  
後のある夜、渦巻きの銀河に立つ観  
音が夢枕に現われたんです。その日  
も遅くまで描いていたのですが、描

き終わってベッドに入るのを待って  
いたかのように突然のことでした。  
これが夢枕というものか!と思いま  
した。そして、すぐに消えてしま  
うのだろうと思い、しっかり受け止め  
ようと見つめました。時間は思った  
よりたつぷりとあって、この間に自  
分の描いている観音の意味と名前を  
知らされたんです。平和と、本来の  
自分呼び覚ますことを願っての銀  
河観音だということ。静寂で美  
しい、祈りの世界でした。

**藤本** 「銀河観音」は高杉さんに現わ  
れた観音だったんですね。この絵を  
象徴する素晴らしい呼び名ですね。

**高杉** 私は、銀河の彼方から私たち  
を見守る存在があるということを知  
らされた者なのだと思います。この  
日を境に、それまで誰にも話してい  
なかつた絵のことがクチコミで広が  
り、個展をさせていただくようにな  
りました。

**藤本** どちらでされたのですか。

**高杉** 地元の横浜では数回やらせて  
いただきました。京都・鎌倉・銀座、  
前回は鹿児島でした。海外はベルギ  
ーや中国での国際展と、サンフラン  
シスコの個展がありました。春には  
アトリエのあるZ.A.I.M.（横浜市  
中区）のフェスティバル、秋には熊本

の予定です。

**藤本** この世界に入るまで、高杉さ  
ん自身の人生にもストーリーがあっ  
たのでしょうか。

**高杉** 私なりにですが、39歳で一人  
暮らしを始めたのが転機になりました。  
40代で佛教大学に編入し、結果  
的に僧侶になってしまったのです。

**藤本** 僧侶になったと、さらにと言  
われませんが、簡単なことではありま  
せんよね。

**高杉** 出家して僧侶になるなんて、  
何か特別な理由があったと思われが  
ちですが、私の場合はむしろ逆だっ  
たんです。自分がとても良いエネル  
ギーの中にいるのに気づいたんです。  
でも、あの頃はまだ何もしていなか  
ったので、「こんな素敵な気分を何  
に使うか知らず? 何でもいから、  
自分にとって世界一面白いことをや  
ろう」と決めたんです。その頃、新  
聞にあった京都・佛教大学の学校案  
内と目が合ってしまった、今さら勉  
強? しかも仏教だなんて考えても  
みませんでした、「これだ!」とい

う確信があまりに強く、迷う余地も  
与えられずに、すんなりその流れに  
乗ってしまったんです。実際はカル  
チャースクールで歴史や仏教美術を  
する程度の軽いノリでした。京都に  
も惹かれましたし、何だか面白そう  
というのが本音です。そこから夢中  
の5年間が過ぎ、気づいたら僧侶に  
なっていたんです。

**藤本** 修行のときは、京都にいらっ  
しやったのですか。



ベルギーの国際展でも「スピリチュアルアーティスト」と絶賛される

## 面白そうと思つた結果 知恩院で修行、僧侶に



Vie Cent ● 編集長対談

素敵に生きる

SUTEKI LIFE<sup>®</sup>

# 夢枕に突然現われた 銀河の彼方に立つ観音様



たかすぎさち●横浜市在住。画僧。水墨観音画家。仏教大学仏教学科卒業後、加行課程修了。京都知恩院にて1997年に僧籍少僧都を得る。1999年に観音画を描き始め、2000年より横浜・京都・鎌倉・銀座など各地で「銀河観音」巡回展開催。ベルギー・中国の国際展やサンフランシスコでの個展でもスピリチュアルアーティストとして絶賛される。エッセイストとしても新聞連載や広告など枠にとられない独自の世界観を持ち活躍。国際文化交流功労特別大賞ほか受賞多数。「sachi庵」庵主。

藤本 本当に素敵な絵ですね。先ほどから拝見していて、描かれている観音様が、なぜか高杉さんに似ているように思えるんです。

高杉 そうですか。ありがとうございます。描くときは何も考えないの、自分ではわからないんですけど。

藤本 それと高杉さんの描かれる観音様には、いろんな表情があるんですね。やさしさだけでなく、力強く見守る感じのものとか…。

高杉 じつと話を聴いてくれたり、微笑んだりする感じのものや、しっかり見つけてくれたり、そばに一緒にいてくれる感じがするものだったりと、それぞれ微妙に違います。

藤本 そもそも高杉さんが、観音様の絵を描くようになったきっかけは、何だったのですか。

高杉 初めて描いたのは、9年前のこと。それまでに起こった出来事の中で、どれか一つが欠けても、出会った誰か一人が欠けても、あの日、観音を描くことはなかったと思うのです。時の流れと人の流れの中でごく自然に観音を描くシーンにたどり着いたというのが実感ですね。直接のきっかけは友だちです。まず友だちの友だちに墨絵画家の個展に誘われ、私が見た友人もお連れすると、その方



ヴィサン編集長

## 藤本裕子

(ふじもと ゆうこ)

株式会社トランタンネットワーク新聞社代表  
1956年福岡県出身、横浜市在住。19年間母親の自立をコンセプトに「お母さん業界新聞」の発行ほか、さまざまな子育て支援事業を展開。現在は新聞「LIVE LIFE」を発行。「ヴィサン」100号より編集長に就任。情報発信やネットワークづくりの傍ら、地域・教育・子育て・生きがいなど多彩なテーマで講演。「お母さん大学」を立ち上げ、全国展開中。  
<http://www.30ans.com>

が先生と意気投合。後日、今度は私が友人のお供で行きました。そして友人がお地藏様を描いたとき、「私だったら観音！」とフツと思っただけです。もし、友人が花を描いていたなら、観音は思い浮かばなかったかもしれない。そう思うと、こわいくらいに一つひとつの出来事に意味があり、つながっていたのです。

藤本 どんな感じでしたか。

高杉 すごく手心えがありました。「今、私の心臓は観音を描くためにドキドキと動いてくれている」と思い

# 「今日から本番、 ゼロからスタート」の精神で

## 誰もが毎日



●Sachi庵 (要予約・無料)  
横浜市中区日本大通34 ZAIM本館201  
TEL045-222-7030



けたらいいなと思っています。  
藤本 絵の魅力はもちろんですが、高杉さんのお人柄が、皆さんを惹きつけるのでしょうか。この絵を通して、高杉さんが、人々に伝えたいメッセージは何ですか。  
高杉 誰もが毎日、「今日から本番、ゼロからスタート」の精神でいけたらいいですね。そして、今日少しでもうれしかったら、今日までの人生は大成功。今日のところまでの人生の最終結果は今日なのです。また、人生は一日一日、決まって進んでいくとも思っています。今日うれしく思えなかったら、明日うれしくなれない。おしゃれのセンスを磨くように、もし今日ここで、物事の受け止め方のセンスを、ほんの少し変

えることで気分が変わるのであれば、やってみる価値はあると思うんです。  
藤本 人生の過去を悔いるのでもなく、未来を不安がるのでもなく、常に今が大事というのは、とても大きなメッセージだと思います。最後に高杉さんの夢を伺わせてください。  
高杉 皆が自分らしく、元気に生きられるためにも、まず、戦争のない平和な世界がいいですね。  
藤本 銀河観音の絵や、高杉嵯知というひとりの人間を通して、たくさんの方が元気になることでしょうか。これからも素敵な絵を描き続けていくつください。今日は、素敵な銀河観音の絵に囲まれてお話を聞くことができ、癒されました。ありがとうございました。

### 対談を終えて

初めて目にした「銀河観音」に、ピツときた私。「こんな素敵な絵を描かれる人ってどんな方だろう?」:私の好奇心がむくむくと込み上げてきて、すぐさま電話を入れた。

こちらの意向を一通り聞いた高杉さんに、訪問させていただく日程を相談すると、「いつでもいいですよ」という言葉が返ってきた。「いつもいろいろな方がみえて遅くなることもあるので、よかつたら今からでもいいですよ」:「つて、こんな方は初めてだった。」

そんな高杉さんだから、お話を伺っていて、すべてが納得できた。流れのままに、思いつくままに、自分の人生を切り拓き、楽しく生きていく。そんな生き方がとても自然で、とても素敵。

「銀河観音を描いているときの高杉さんはどんな風?」と想像し、質問すると「むしろ、描いてないとき、どんな思いで過ごすかが大切なんです。こうして人様とお会いしている今・このときこそが、描いているようなものなんです」と微笑まれた。その生き方が、一寸の狂いもない線となつて、美しい姿の銀河観音をあらわすのだ。

「あなたの中の観音に会いにいらしてください」という彼女こそが、あなたかく人を包み込む「銀河観音」に違いない。

(藤本裕子)